

向山 直佑 (Mukoyama Naosuke)

2019～2021 年度奨学生

オックスフォード大学 政治国際関係学部 博士課程

今月より、新たに日本人留学生奨学金の受給者として、奨学生の仲間入りをさせて頂くことになりました。第一期生として、今後の募集にも協力させて頂きつつ、将来的には奨学生同士の横の繋がりを充実させることができるようにしていきたいと思えます。

私は現在、オックスフォード大学の政治国際関係学部 (Department of Politics and International Relations) で、博士課程の2年目が終わり、3年目に入るところです*。同学部の博士課程には、去年まで日本人の方がもう1人いましたが、最近博士号を取得されたため、私が唯一の日本人となる模様です。オックスフォード大学全体としては、学部生はほとんどが(白人の)イギリス人で占められており、まさに階級の再生産工場として機能していることは周知の通りですが、大学院生は逆に極めて国際的で、ヨーロッパを中心に様々な国や地域から留学生が集まっており、イギリス人は少数派になっています。これは、一部には、留学生から莫大な学費を徴収して収入源とするという大学側の目論見によるところが大きく、特にEU外からの留学生の学費は年300万円近くのにのぼります。私のような、授業のほとんどない博士課程の大学院生にとって、これは大学から受け取るサービスに全く見合わない価格ではありますが、それでも人が集まってくるところに、やはり大英帝国の栄光の残滓と、それに由来する「英語」という圧倒的な強み、そして幾ばくかの学問的な魅力を感じさせられます。

このように、大学や国際的な高等教育のあり方については批判的な部分も多い私ですが、これまでの2年間のオックスフォード生活を振り返ってみると、例えようもなく充実したものだったと言わざるを得ません。特に、私が所属するカレッジ (St. Antony's College) は、社会科学専攻の大学院生用で、非常に国際色の強いカレッジということもあり、ダイニングホールやコモンルーム、バーでの各国から来た友人たちとの会話は、知的な刺激に満ち溢れていました。このカレッジという仕組みは、オックスフォードやケンブリッジに特有のものですが、日本語では「学寮」と訳されます。多くの学生がカレッジ内に住み、カレッジ内の食堂で食事を取るのですが、この「共同生活」が、キャンパス外の一般のアパートに住むのが一般的な日本の大学では得られない、濃密な人間関係をもたらす理由になっています。

学問的には、楽なことばかりではありませんでした。新参者であるところの私は、アジア人というマイノリティでもあり、また英語を母語としない留学生であるという「ハンデ」を背負っており、ヨーロッパや北米からの留学生が多数を占める博士課程の中で、「優秀」だという評価を勝ち取るのは容易なことではありません。ましてや私の場合、交換留学は経験しているものの、英語圏で学位を取得するのは初めての経験であるため、なおさら当初は存在感を示すのに苦労しました。しかし、幸いにも指導教員は最初から私の研究を買ってくれ、周囲の院生や他の教員にも、研究発表の機会などを通じて、徐々に自分の存在を認知し、評

価してもらえようになってきました。1 年目はまだ、主観的にも客観的にも「お客さん」という状態だったのが、2 年目になると徐々に、こちらに根を下ろすことができるようになってつつあります。

博士課程の研究では、天然資源と国家成立過程の関係、特に石油が東南アジアや中東の脱植民地化にどのような影響を与えたのか、という問題に取り組んでいます。言うまでもなく天然資源の獲得は、ヨーロッパ帝国が植民地化を進める誘因の 1 つであったわけですが、植民地が解体される局面においても、実は強い影響を及ぼしていました。具体的には、石油が存在していたことで、「本来存在しないはず」の国家が成立した、という事実があります。東南アジアのブルネイ、中東のカタールやバーレーンといった国々です。こうした国々は、石油が比較的早期から開発されていたことで、財政的に潤い、またイギリスの保護を得ることができるようになり、結果的に、脱植民地化の場面においても、強い交渉力を持って、周辺地域との合併を避け、単独での独立という結果を得ました。こうした経緯を、周辺地域と比較しつつ明らかにし、また同時に石油以外の資源が同様の効果を持たないのはなぜか、という問題も扱う予定です。

私は 4 年間で博士号を取得する予定のため、残り期間は 2 年、つまり今ちょうど折り返し地点を通過したことになります。新たな活動として、今年度はティーチングを始めることになりました。将来的に研究者として就職することを考えると、ティーチングの経験は必要不可欠になりますが、同時にそちらに時間を取られすぎると、研究の時間が削られるという難しいものでもあります。そのため、1・2 年目は避けてきたのですが、4 年目は博士論文の仕上げや就職活動に費やすことを考えると、3 年目がベストなタイミングでした。オックスフォードのティーチングは少し特殊で、院生はいわゆる TA ではなく、チュートリアル (tutorial) という、一対一あるいは一対二の少人数のセッションを受け持ちます。これは教員が教える授業の内容を踏まえて学生が書いたエッセイを添削し、指導するというもので、イメージとしては家庭教師に近いでしょうか。英語で教えた経験はないため、少し不安もありますが、新しいことにチャレンジするのは楽しみでもあります。その他にも、学術論文の投稿や学会発表、諸々のソーシャルイベントへの参加、旅行など、研究・生活共に、これからの 2 年を、これまでの 2 年以上に充実させるべく、邁進したいと思います。

最後になりましたが、資金面でハードルの高いイギリス留学を支援して下さいる坂口財団の皆様、ならびに審査員の先生方に、心より感謝申し上げます。これからどうぞよろしくお願い致します。